

(別紙2)

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 デ. ゼズス. ディオニジオ マリア. リタ

世界的な都市再生の展開に伴い、都市の競争力を創造性によって評価しようという「創造都市論」が注目を集めている。しかしながら、創造都市論の評価法は経済学的、もしくは社会学的視点に立ったものが多く、都市空間と創造性の関係についての研究は少ない。本研究は、演劇活動や路上パフォーマンスなどによって知られる東京・下北沢の実地調査を通して、都市空間と創造性の関連性を解明し、その評価法を定立しようとする目的を持っている。

まず、論文では下北沢における延べ660人の歩行経路の調査から往来の多い21の街路を抽出し、それぞれの街路における人々の通行・滞留状況を調査することで、街路がいかに社交活動に利用されているかを示す共愉性(Conviviality)指標が提案される。その上で、実地調査によって得られた建物のセットバック状況(距離および面積)および建物用途の分布と共愉性指標の相関が分析され、建物のセットバック状況が街路の共愉性向上に大きく影響していることが示される。

次に、この一連の分析手法を展開させる形で、論文では下北沢に点在する創造活動施設(劇場・ギャラリーなど)に着目し、創造活動施設の分布が共愉性向上にいかに関与するかについて、分析を試みている。さらに相関をパターン分けすることにより街路の類型化を行い、下北沢の街路ネットワークの特徴を解読する。その結果、共愉性は平日では比較的分散しているものの、週末では創造活動施設の周辺への集中が見られること、平日では駅周辺に共愉性の集中が見られ、その度合いは夜になるにつれ強まること、などの知見が得られている。

以上のような論文の内容を踏まえ、審査委員会は次のような見解を持つに至った。

第一に、創造性と都市空間の関連を捉えようとする論文の目的は極めて野心的なものであり、論文の先駆性、学術的意義が評価できる。

第二に、論文は膨大な実地調査をもとに書かれており、その綿密性、資料性は一定の価値を持つと判断することができる。

第三に、本論で提案された評価手法は他の都市にも応用可能なものであり、創造都市の議論をさらに深化させる可能性がある。

第四に、評価手法の解像度が粗く、ダイナミックな街路活動を捉えきれない可能性が当初は指摘されていたが、論文では大きく改善され、下北沢の特徴が良く捉えられたものとなっている。

第五に、既往研究の意義と課題、および今後の創造都市論の展開に必要な研究領域が丁寧に述べられており、後続の研究の基点として参考するに相応しい記述がなされている。

創造性と都市空間の関連の解明という主題に対して残された研究課題はまだ多くあるものの、本論文は独自に開発した評価手法の有用性を十分に示しており、具体的な街路空間設計に寄与する貴重な知見も提供している。それゆえに、本論文の内容が学位論文に求められる水準に十分に達していると判断した。よって、本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。